

苦しかったね。もう大丈夫だよ

朗読者 中澤裕子

ここ福岡で、子どもへの虐待防止をテーマに、講演活動や執筆活動に懸命に取り組んでいる女性がいます。

ペンネーム、ほしおか十色さん。

彼女は高校生の時、お金を得る為に売春を行い、やがて警察や児童相談所の支援を受けることになりました。

「なぜあんなことをしなければならなかったの」と聞かれ、彼女は答えました。「こども電話相談にたくさん電話をするので、その通話料が必要なのです。毎月20万円以上かかるんです」

誰もが驚きました。当時はまだ、携帯の通話料がとても高い時代で、身体を犠牲にしてまで、こども相談ダイヤルに電話をかけ続けた理由がわからなかったからです。

彼女は、こども電話相談では、何を相談するでもなく、日常会話しかしませんでした。電話相談員の人が「どうしたの？」と何度問いかけても「別に」と答えるばかりで、電話をかけ続ける本当の理由には話さなかったのです。

彼女が抱えていた深い心の傷を、警察官や相談員の人に打ち明けることができたのは、大人になってからのことでした。

実は、彼女は小学生の頃からずっと、父親から性的な虐待を受けていたのです。

ほしおかさんは今日も、講演や手記の中で、自身の辛い経験を語りながら、社会に向けてこう訴え続けています。

25 「逃げ場のないこどもがいることを、知ってあげて下さい。

あの頃、『もう私の体なんかどうなってもいい。死にたい』と、薬物に溺れ、リストカットや摂食障害に苦しむ中、電話の向こうから聞こえてくる『大丈夫？』という優しい声だけが、私の命綱でした。でも、どうしても本当の悩みを相談することはできなかった。

30 本当は電話越しではなく、身近な人に声をかけて欲しかったのです。

どうか、子どもの問題行動だけで『非行』だと決めつけず、その問題行動に隠れている子どもの心の声を聞いてあげて下さい」

35 子どもの頃に周囲の大人から、かけて欲しかった言葉を、今は、ほしおかさんがこどもたちにかけて続けています。

「辛かったね、苦しかったね。もう大丈夫だよ。あなたを助けられる大人が、ここにもいるよ」

40